

リレー  
乳鉢

## 国民文化祭への参加

豊後大野市医師会 坪山明寛

今年の立春は暖かく、白梅紅梅が陽光に鮮やかに映えていた。春といえば今年の仲春、診察を終えるや否や、患者さんが「先生、シナリオをひとつ書いてください。国民文化祭に参加したいんです」と言った。私は「えっ何ですか、急に」とのけぞった。この方は清川在住で長年劇団を主宰されていて、国民文化祭に新作上演をして参加したいというのだ。大分開催の国民文化祭を、私も楽しみにしていた。でもそれは開会式見学・演劇や美術館での絵画鑑賞ができるからだ。

この方の申し出を聞き一瞬戸惑った。でも考えてみると、地域貢献が社会医療法人関愛会の理念だし、文化祭に受け身ではなく積極的参加ができると思い「わかりました」と返事した。でもそれからが大変だった。何を書こうかと毎日思いを巡らし悩んだ。そして“もうおねがいゆるして・・・”を書き残し、父親の虐待で亡くなった女児のことが浮かんた。子供を守り育てべき家族に殺められるという悍ましさ、身も心も震えた事件だ。

テーマを「家族の中の父親」とし、社会問題化している長時間労働による父親不在を縦軸に、子供の不登校、妻の心身障害を横軸に書き進め、全8幕原稿用紙30枚の脚本を書きあげた。素人の私には原稿30枚は難儀だった、が心地良さも感じた。細かな校正作業を終え、さてと考え込んだ。タイトルをどうしようかと。「長時間労働の弊害」「子供の成長と家族」・・・しっくり来ない。いつもは俳句を考える通勤時間がタイトル思案となった。ある日菊池寛の「父帰る」が浮かんた。あの作品は、家族を捨てた父親が高齢になり我が家に帰ってきたが、長男が頑として父親を拒み追い出す。でも父親を見捨てられず、連れ戻しに飛び出すという結末の戯曲だ。家族の絆の危うさと深さを示した作品だ。私のシナリオも、父親の心が職場より家族に向くというあらずじだ。タイトルを真似ても盗作にはならないだろうと考え、「父帰る」を脚本の題名とした。その後劇団員達の猛練習と大道具の準備が始まり、昨年11月10日“エトピアおおの”で上演となった。

このような形で第33回国民文化祭・おおいた2018に参加できて有難かった。今後も機会があれば、地域医療はもとより地域文化活性化にも協力していきたいと思うことだった。

# リレー随筆

## メディカルファッション講座 ～服は着る薬

大分郡市医師会 松島文子

服は着る薬という言葉聞いたことがありますか？大分市在住の服飾デザイナー，鶴丸礼子さんの言葉です。鶴丸さんは仏オートクチュール“GIVENCHY”（ジバンシィ）のアトリエを経て独立し，障がい者の服作りをライフワークにしておられます。

側弯のある方，円背の方，脊損患者，バルーンや胃ろうのある方，乳癌患者，リウマチ患者。HAM，筋ジス，レックリングハウゼン病等さまざまな難病，諸々の加齢に伴うカラダの変化。それぞれ既製服が合わないために，動かせるはずの体が動かしにくくなったり，好きな服を着ることができなかつたりという悩みを抱えておられます。鶴丸さんは，患者さんの悩みを聞きながら，一人ひとり採寸してはミリメートルの単位で型紙をおこし，障がいに合わせた服を作っています。鶴丸さんの願いは「誰もが服選びの悩みから解放され，服をまとう喜びを感じ，社会に参加して楽しく生きられるように」そんな服を届けたい，ゆくゆくは服を作る学校を作りたいと奮闘しています。

そんな鶴丸さんが本年度，大分市障害福祉課の企画として，障がいを持つ人々の衣服の悩みを解決するための洋裁講座をスタートさせました。「障がい者の『着ること』なんでも相談&ファッション講座」という正式名称がありますが，長いため割愛。私はメディカルファッション講座とか洋裁講座と呼んでいます。市報をみて応募し，昨年5月よりなんとか月に1-2回のペースで通っています。講座の生徒は障害者手帳を持っている方を含めて約40人。黒一点の男性もいます。

洋裁講座ではグループに分かれて，「リウマチ患者のエプロン」「拘束に相当せず，弄便できない服」「車いすに座った状態で“映える”ハタチの振袖」「ノーブラでもきちんとみえる服」などテーマを決めて服作りに取り組んでいます。私事，子育てしながらフルタイム&当直勤務をしています。常に電話が鳴り，病棟に“出動”し，搬送して帰宅するような「ワークライフバランス」，さらに地域医療，訪問診療，災害医療，口から食べる摂食支援にも携わる「ワークワークバランス」です。力不足にして，洋服の勉強をする時間は作れず，気持ちだけが荒野を駆け巡っています。メディカルファッションが患者さんのADLの向上につながるかどうか，研究デザインを立てるところから挑戦していきたいものです。



※鶴丸先生が生徒たちにレクチャーしている場面



## テレビの中のビッグデータ， ポケットの中のビッグデータ

大分郡市医師会 平山匡史

近ごろテレビなどでよく耳にする『GAFA』という言葉のことを皆さんご存知でしょうか。Google, Apple, Facebook, Amazonの4企業をまとめた呼称です。大分の山奥出身の私でさえ、私用・仕事用とiphoneを持ち、Googleで検索し子供との外出先を決め、Amazonで買ったものを日々受取り、Facebookで医師としての活動を知ってもらうように文章を書き、まさに「平素より大変お世話になっております」です。

今の職場『よつばファミリークリニック』は所属する法人が新規開業したところです。院長として日々努力していますが、広報活動も力をいれています。そのうちインターネット上には私が書いているFacebook、ホームページと当院事務長が書いているGoogleビジネスがあります。このGoogleビジネスとはGoogleで会社名などを検索したら画面右に情報がでてくるアレです。ある程度無料で使えるサービスで営業時間の案内や新着情報のアップロード、口コミ記載などができます。この更新を事務長ががんばってくれているのです。事務長が更新するとそれを見た患者さんから問い合わせがあったり、アクセス数が徐々に増えてたりするのを見るといい広告ツールだなと思いました。

しばしば自院名を検索しては自院の悪評などがないか恐る恐る眺めている私は、当院のGoogleビジネスの記載に『訪問数の多い時間帯』という項目があることに気づきました。水曜は多くの時間帯で来院患者が多め、半日の木曜は昼に近づくとつれ患者数が減る、金曜は夕方閉院前が混むなど私の肌感覚と合致しており、「事務長もがんばっていろいろ書いているなあ」と思いました。このことを話すと、事務長「あれは特に私が入れた情報ではないですよ」とのこと。ん？じゃああれは誰が集めた情報？あれ、ひょっとして蓄積した携帯のGPSか何かのデータをGoogleが分析している？などと考える私。実際のところはわかりませんが、おそらくそういったことではないかと思っています。

以前よりAmazonからのメールで「あなたにおススメの本」を見ては「そうそう、こういう本がほしかった」と次々に買っていた私は、これもビッグデータの極々一部を利用したAmazonの思うつぼだったんだなと感じました。

EBMを重視する私は過去の情報の蓄積の偉大さを感じてはいましたが、その反面怖さも垣間見たように思います。情報がダダ漏れにならぬよう気をつけなければと思う今日この頃、ポケットからスマートフォンを取り出しては『よつばファミリークリニック』とググっている私がいるわけですが（笑）。

リレー  
乳鉢

## 国際学会



大分郡市医師会 藤谷直明

大分循環器病院の増田季美子先生のご紹介でリレー随筆を書かせて頂きます藤谷直明と申します。

私は診療所の医師になりたいと医学部を目指し、平成20年に大分大学医学部を卒業しました。その後、岡山で後期研修をして、総合診療専門医の前身である家庭医療専門医となり、現在は、大分大学の総合診療・総合内科学講座に所属し、由布市庄内町の宮崎医院という診療所で働いております。総合診療はあまりなじみのない方も多いかと思いますが、診療所での研修もあり、診療所やあまり規模の大きくない病院、臓器別に専門分化していないところで働くのに役立つ専門だと思っております。

先ほど、「臓器別に専門分化しない」と書きましたが、プライマリ・ケアの専門として機能することを目標とした専門医であり、国際学会もあります。ということで、今年は総合診療の国際学会であるWorld Organization of Family Doctors (WONCA)に参加させて頂きました。

初の国際学会への参加にあたり、久しぶりに英語の勉強を再開しました。最後に英語を勉強したのは4年ほど前に、海外から学会の講師を迎える担当となり、1年ほど英語の勉強をしました。しかし、結局、講演を聞き取るのすら難しいまま終わってしまいました。

今年こそは少しぐらい意見交換ができるようにと、出発前の2か月は英単語の勉強に、リスニングの教材、さらに海外ドラマを英語のまま字幕付きで見たりと、1日2時間ほど勉強しました。その甲斐あってか、講演の内容はなんとか聞き取れました。しかし、質問したり、意見を言おうとすると、単語が出てこず、言葉に詰まってしまいました。単語一つとってもリスニングとスピーキングは別技能であることを痛感させられました。

今回、韓国で開催されたWONCAですが、次回は2年後にアラブでの開催です。個人では決して行きそうにない国であり、これを機に次はスピーキングも学び、アラブに行ってみたいと思います。

# 乳鉢

## 2足のわらじ

大分市医師会 増田 季美子

同じ病院で勤務される西村順子先生よりご紹介をいただきました増田季美子と申します。私は平成18年に大分大学医学部を卒業し、研修医期間を経て、憧れだった循環器内科を専攻いたしました。その後、病態生理学講座の大学院生となり、電気生理の魅力と奥深さに翻弄されつつ、はっ！と気がつけば3人娘のお母さんになっておりました。大学院卒業に目処がつきはじめたある日、医局より院卒業後の勤務先についてお話がありました。家庭の事情もあり、時短勤務の希望を相談しましたが、私は上記のような経歴で臨床に関しかなりブランクがあり、こんな私を雇ってくださる病院があるのだろうか・・・と1人悶々と悩んでいたところでご縁をいただいたのが、現在勤務しております大分循環器病院でした。キャリアも臨床スキルもない、小さな子どもが3人もいる、そんな状態の私を皆さまが本当にあたたかく受け入れて下さいました。診療では上司・同僚の先生方が具体的なアドバイスを下さり、細かなところまで相談にのって下さいます。勤務内容につきましてもこまめに相談にのっていただき、私にとってはまさに家庭もキャリアも大切にできる夢のような職場で、皆さまに「おんぶに抱っこ」されながら充実した日々を送っております。最近では心不全診療の奥深さを感じることも多く、適切な治療により状態が安定した患者さんが、心臓リハビリテーションを行いながら医療スタッフも一丸となって退院を目指し、退院後の実際の生活にまで思いを馳せながら、みんなで治療方針を決定していく様子は、改めて医療が患者さん1人1人の人生に大きく関わる事柄であることを深く感じております。仕事を終わると3人娘のお迎えへ行き、今度は「お母さん」の仕事です。娘たちは私の仕事をよく理解し、いつも応援してくれます。寂しい思いをさせることも多かったと思いますが、彼女たちがせっせと作ってプレゼントしてくれる工作には「いつもおしごとありがとうございます。大きくなったらママみたいなお医者さんになりたいです。」と手紙が添えられており、少し目頭が熱くなりながら、良医となれるようもっと頑張ろうと思うこの頃です。

素晴らしい職場とのご縁に感謝し、皆さまにご恩返しができるよう、そしていつか成長した娘たちがそれぞれの分野で皆さまからいただいた愛情をお返ししていけるよう成長を祈りつつ、精進していきたいと思っております。



## リレー随筆

## 日々思うこと



大分市医師会 西村 順子

この度、田崎貴子先生からのご指名で、リレー随筆を書かせていただくことになりました西村と申します。平成14年に大分大学医学部を卒業し、専門は消化器内科です。

大学院を卒業した後、2人の子育てをしつつ徐々に臨床の場に復帰させていただき、現在は大分循環器病院に勤め、早3年が経ちました。大分循環器病院にはその名の通り循環器疾患の患者さんがとても多いのですが、循環器科のほかに、整形外科、心臓血管外科、腎臓内科、麻酔科、消化器科といった科で構成されています。

病床数は99床とちょうどよく、横の連携がとれていて働きやすいです。消化器科は、午前中は外来とエコーや上部消化管内視鏡検査、午後は下部消化管内視鏡検査を週3回、それ以外の日は肝腫瘍の患者さんの血管造影検査(治療)とRFAをそれぞれ週1回行っています。

外来をしていると予約以外の一般消化器内科疾患の患者さんが飛び込みで多数受診されます。そんな中、消化器疾患の季節性というものがあるのではないかとということに気づき、興味深く感じています。例えば、生活の変化がある3月から4月ごろは消化性潰瘍が多く、その波が収まろうとする6月から7月ごろはなぜか毎年大腸憩室炎(出血も)が多くなります。今年の6月から7月は憩室出血の患者さんが次々と重なり、一人が落ち着くと、また別の患者さんが下血して、といったようにとても大変だった印象です。7月から8月は胆石が痛む患者さんがちらほら見られました。夏が終わるところから少しずつ感染性胃腸炎の患者さんが増え、冬にピークを迎えます。以上は全くの私見ですが、このような疾患の季節性を感じつつ診療をされている先生方は多いのではないのでしょうか。大分循環器病院に勤め始めてたった3年で感じたことですのでたまたまかもしれません、これからも季節性に注目しながら診療をするのも面白いかもしれないと感じています。

このようなことを考えられるのも、若いころとは違い少し余裕が出てきて周りが見えるようになってきたからかなあと自分の変化も感じながらこれからも診療を続けていきたいです。

リレー  
乳鉢

## 親の心配



別府市医師会 田崎 貴子

たねだ内科 種子田紘子先生から、リレー随筆の御紹介をいただいた中村病院の田崎貴子と申します。投稿の機会をいただき感謝しつつ、随筆させていただきます。

昨年、「各国で家を建てる」という目的を持つNGOのサークルに属す一人娘が、カンボジアに活動に行くと言い始めました。面白そうだと同意していましたが、行く前になって同意書にサインが必要と言います。「生命に関する全ての責任を〇〇氏に預けます。身体に何があっても何の申し立ても致しません。」といった主旨の同意書を数枚。驚いて、〇〇氏とは誰かと問うと、「同行する同級生だよ」と。「悪いけど、大切な娘なのに、サイン無理や」と断った所、いつも強情な娘が「そうだよ」とあっさり引き下がりました。

確かに、海外での経験は身になるものが多いと思います。自分も若い頃旅が好きで、東南アジアや南アジアを中心にアフリカや南米まで様々な国でバックパッカーとして歩き回り、様々な人や文化と出会い、価値観の違い等とても学ぶ所がありました。スラムや戦闘地域には近寄らないなど、自分なりに危険回避の努力をしてきましたが、当然それなりに危ない経験もします。運良く毎回五体満足に帰国したものの、今振り返ると、親がよく黙っていたものだと感動します。

しかし、それは古き良き時代の話であって、様々な感染症に加え、昨今テロ活動なども増え、最近の海外渡航は以前よりもリスクが増しているように感じます。

今年もその時期が来ました。恐れていた通り、娘から申し出があり、今回は中国桂林での活動と。昨年、帰国した友人達をみて、「ぼろぼろに汚くなってた、行かなくてよかった。」と言っていたのに、彼女なりに1年間考えたのでしょう。抵抗を感じつつ、参加に同意しました。後悔するのか、或いは彼女が一步成長するのか。カンボジアでは、自分が訪ねた頃、銃声がしばしば鳴り響いていたし、まだ残存する地雷には国民の方々も被害にあっているそうです。自分が拒否したのもやむを得ないと思います。桂林についてはup-to-dateな情報を持ちませんが、大切な家族、私が過保護すぎるのか、すごい賭けをしたように感じます。自分の正直な気持ちをそのまま綴りましたが、皆さんは、このような子供に関する不安をどのように解決しておられますか？

## リレー随筆



## 大分はすてき

大分市医師会 種子田 紘子

私は2010年から2016年まで国際医療福祉大学三田病院に勤務しておりました。東京タワーが近い場所です。お家も病院まで徒歩5分の場所に住んでおり、窓からは東京タワーと六本木ヒルズの夜景が見える素敵な場所でした。羽田空港までタクシーで15分、六本木や麻布十番などの繁華街まで徒歩10～15分と楽しく、大変便利な場所でした。しばしば、都会の素敵なレストランでおしゃれな食事やお酒を楽しんだり、ショッピングをしたり、平日の仕事終わりにディズニーランドやシーに行ったり。同僚の先生もすごい先生が多く、東大を首席で卒業された先生、学位を2つも持つ先生、イギリスと日本の医師免許を持っているロンドン大学医学部卒業の先生、3か国語が流暢な看護師さんも多く、刺激的な楽しい毎日でした。しかし、贅沢なもので東京タワーの夜景も、素敵なお店も日常の一部となると珍しくもなくなってきます。そうすると、都会の不便な面が気になります。大型のスーパーなどは郊外にしかないの、日用品はアマゾンなどの宅配に頼らなければなりません。かさばる紙おむつなどは近所ではまず売っていません。土地が高いので、場所をとるものはお店に陳列しないのです。急にちょっとしたものが必要だと、新宿やお台場のほうに買い物に行かねばなりません。近所のスーパーでは大分でとれたお魚が高級魚として売られています。福島原発事故の影響で、九州産の野菜やお魚などは高値で売られています。空気が汚いので晴れていてもあまり青空になりません。夜空には星より飛行機やヘリのほうが多い。大分はなんて自然が豊かで空気もきれい、なんでも並ばなくて済むし、安心な食材が新鮮でおいしい。星空や緑多い山々、ひろびろとした青い海、大分に住んでいると気が付かない大分の価値に気が付かされます。子供が1人の時は子供と私で東京に単身赴任をしておりましたが、2人目が誕生し家族と一緒に過ごす時間を第一に考え、また当時の教授が退官になられるのを機に大分に帰ることにしました。大分にいますと学会などの遠征は多少不便に感じますが、これまでが空港まで近くて便利ただけ。都会はすてきなようで何にもない。何でもあるけど、人もたくさんいるので自分が手にできるのはほんの一部。今日も絵葉書になりそうな大分のきれいな青空を見ながら考えます。



リレー  
乳鉢

## 魅惑の球体

大分郡市医師会 種子田 治 明

50歳を超え、眼鏡が遠近両用になり、肩こりや肩関節痛に悩まされるようになってきた。仕事の疲れがとれず、新聞や雑誌を読まなくなり、見るテレビ番組はもっぱらNHKのニュースやドキュメンタリー番組、気晴らしに乗っていたバイクも車検のときに乗るだけとなってしまった。子供のころは、大人は何でも知っていて、何でもできるものだと思っていたが、全くの勘違いだったことに気付いてうん十年、このまま人生の坂道を下っていくのは悔しいので、人生のピークを60歳台に設定し、この10年はそのための準備期間に充てることにした。とはいえ、何をしたいのかも明確ではなく、毎日をこなすように過ごしていたある日、インターネットでふと、銀色に輝く球体を見た。これは一体何でできているのでしょうかとの問いかけに、何だ、何だとマウスをクリックした。すると1本のアルミホイルで作られているとのこと。アルミホイルをぐちゃぐちゃに丸めていき、あとはひたすら金槌で叩くだけ。継ぎ目もなく、まん丸の球体が本当にできるの？と釘付けになり、久しぶりにスイッチオン。早速近所のお店でアルミホイルを購入し、自宅のマンションでカンカン音を響かせるわけにはいかないため、外来診察の合間や昼休みにクリニックの金槌で叩きまくった。アルミは軟らかく、叩けば簡単にへこむので、くるくる回しながら形を整えていく。硬くなってくると、音もグシャツとした低い音から、甲高い金属音に変わっていき、叩いてもへこまなくなってくる。完全な球体を目指して形を整えていこうとするものの、何せ初めてのことであり、どうしても凸凹が残ってしまう。職員は副院長の私にうるさいと文句を言えず、一体何が始まったのかと訝しげに見ていたが、くしゃくしゃのアルミホイルが徐々に丸みを帯びた銀色の物体へと変化していく様に驚きを示すようになった。これ以上はもう無理！となったところで、やすり、目の違う数種類の紙やすり、金属用の磨き粉、つや出しのスプレーの登場。やすりと紙やすりで削り、磨き粉を塗り塗りしながら磨き上げ、スプレーで仕上げ。最終的に銀色に輝くりんご型のペーパーウエイトとなった。久しぶりの工作はなかなか楽しく、形成外科医の自分にはちまちまと作業するのが性に合っているのだと改めて実感した。周りに迷惑をかけずに自己満足できる素敵なものづくりはないか、ネットでまた検索してみよう。



## 徒然草に学ぶ



大分郡市医師会 則行英樹

私は最近、静かな夜の読書を日々のささやかな楽しみにしています。目下ハマっている本が昨年書店で何気なく手に取った「徒然草」です。ご存知のように、これは鎌倉時代に吉田兼好が著したとされる随筆集なのですが、意外にも多くの内容が現代にも通用し、大変興味深く読むことができます。

- ・『ひとり燈（ともしび）のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむるわざなる（第十三段）』。まさにこの心境で毎晩徒然草に親しんでいます。
- ・『世に語り伝ふること、まことはあいなきにや、多くは皆虚言（そらごと）なり（第七十三段）』。本当にそうです。情報が溢れかえっているこの時代では、事の真偽を正確に見定めることのできる目を養わなくてははいけません。そうそう、世間に数あまたある健康法にも気をつけておかねば。
- ・『いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそめさむる心地すれ（第十五段）』。非日常体験を行うことで脳が刺激され、時にストレスの解消にもなりますが、そのもっともポピュラーなものが旅でしょうか。学会出張は気楽な一人旅を兼ねますので私は大好きです。
- ・『古いぬる人は、精神おとろへ、あはくおろそかにして、感じるごく所なし（第七十二段）』。年齢からくる身体の変化を痛感するこの頃ですが、身は老いても感性豊かな生活を送りたいものだと思えます。
- ・『人はただ無常の身に迫りぬることを、心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり（第四十九段）』。『人皆死あることを知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来る（第一百五十五段）』。最近、親族、恩師、知人の死に接することが多くなり、その度にこれまでの生き方を柄にもなく真面目に自省します。限りある命、これからの自分にいったい何ができるだろうか。
- ・『手のわるき人の、憚らず文書きちらすは良し（第三十五段）』。私は冠婚葬祭での記帳が大の苦手なのですが、まるで兼好法師が悪筆の私を励ましてくれているかのようです。
- ・『一事を必ずなさむと思はば、他の事の破るるをもいたむべからず（第八十八段）』。優柔不断な私にはとても真似できない生き方です。一つの道を究めることのできる方はきっと強い精神力をお持ちなのでしょう。
- ・『身死して財（たから）残ることは、智者のせざるところなり（第四十段）』。なるほど。これから私は智者を目指すことにしよう。これならば実行できそうです。（笑）

 乳鉢

## 近況報告

中津市医師会 酒井 啓一郎

2年前、父親が病気に伏せたため、突然といって良いのか理事長の職を任されることになった。当然のことではあるが、医師の仕事以外に経営面も担っていかなければならない。大学時代は外科を専攻していたが実家では一般内科や産業医などの職務に就いていた。企業で産業医に選任されてからは予防医学にも興味を持ち労働衛生コンサルタントの資格も取得した。

当院は、76床のベット数がある外科病院でその他にも各診療科の専門の先生方も勤務されている。また、当院で常勤で勤務されている先生方も高齢になりつつあり、今後、病院機能の在り方も考えていかなければならない状況である。

また、病院も老朽化が進みそろそろ病院の増改築も考えていかなければならず、経営面を維持させていくには私も外科医として、また、新人の経営者としても奮闘しなければならないと思っている。

私は昔から体を動かすことが大好きで趣味であるマラソンを楽しんでいる。

マラソンをすることにより仕事でのモチベーションを高めることができ、又、メタボ解消にも役立てている。

その見返りといっってはなんだが、休肝日も作りお酒も適度に楽しみストレス解消をしている。

経営面の維持のためには、対外的なところは社会的でない自分にとっては以前、青年部で番をばっていたスーパーかみさんを頼りにしているところである。

ここでスーパーかみさんのことを簡単に紹介してみると私の父親の介護を毎朝5時からしてくれ、経営面なども助言をしてくれ、子供の勉強もみてくれる。

料理も上手で外食に出てもカミさんの手料理がとても美味しいことがわかる。

私にとってはもったいないくらいのカミさんである。

おかげで心配することなく仕事ができ、かなり助かっている。

今できない事があっても数年後は普通にできていることもたくさんあると思う。

第16代アメリカ合衆国大統領 リンカーンの名言に

I am not concerned that you have fallen - I am concerned that you arise  
とあるが

失敗という事実を変えることはできないが、必ず迫り来る失敗からどう乗り越えていくかが重要であるという意味である。

ひとつひとつ諦めず何事もチャレンジ精神で理事長職を務めていきたいと思う。

最後に、父親にも長生きをしてもらい、娘（孫）の成人式の晴れ舞台をみてもらいたい。

# 乳鉢

## オリンピック再考（私の持論）



大分市医師会 吉田盛治

平昌冬季五輪で日本中がフィーバーしている時にこの原稿依頼がありました。日本のメダル獲得数は冬季五輪史上最多となり、国民栄誉賞授与や報奨金の話題がマスコミを賑わせています。このような五輪フィーバー時に、水を差すような原稿を書く自分は非国民と思いますが、私の五輪に対する持論を述べたいと思います。

五輪憲章に記載されているモットーは、「より速く、より高く、より強く (Citius-Altius-Fortius)」です。五輪の舞台は、アスリートが極限状態で最高のパフォーマンスを成し遂げた時にメダルが授与されるものであり、凡人には到達することが出来ない神の領域と私は考えています。

そこで皆さんに問いかけますが「より美しく」というモットーは入っていませんよね。私の持論とは、五輪競技には芸術点等を含む採点競技は馴染まないというものです。採点競技には客観性が無く、審査員の好みや愛国心等によって、競技成績が変わってしまうことに私は全く納得出来ません。

2002年のソルトレイク冬季五輪では、フィギュアスケートのペア競技で審査員の判定に論争が起こり、結局金メダルが2個授与されました。今回も中国選手に対する採点に批判が集まりました。

このような芸術性を求める競技は、演技をした選手がノーミスで全力を出し切って満足できたらそれで良いのでは？採点競技は世界選手権やワールドカップ等で行えば？何も五輪競技でなくても……。芸術の世界でも音楽コンクールや美術展等で1位、最優秀賞、金賞等があります。それでいいじゃないの？日本のお家芸であるフィギュアスケートや体操競技等に対して、私にはその思いが強く湧き起こります。フィギュアスケートの日本人2選手はミスがあってもメダルを獲得しました。一方、スピードスケートの小平選手は、僅かなミスでもタイムに影響する中で完璧な滑りをみせて五輪新記録の金メダル。男子500mスピードスケートでは金・銀メダルのタイム差は僅か100分の1秒。この厳しさと比較して審査員の採点の曖昧さにどうしても疑問を抱いてしまうのです。美しさの点差が1点とは？もちろん演技をしている選手は立派なアスリートですが……。私の胸の内はどうしてもスッキリしません。いっそ、採点競技では完璧？な演技に対して金メダル3人（銀・銅なし）、完璧？でなければメダル該当者なしという制度にしては……？

でも、まあいいか。金メダルのおかげで日本中が盛り上がるなら。